様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21 年　　5 月　25　日現在

研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：２００７　　～２００８
課題番号：１９７２００４７
研究課題名（和文）　クローチェ美学の受容の問題を中心とした大正期文芸思潮の研究

研究課題名（英文）　Research in currents of literary thought in the Taisyo era which centers on the influence of Croce's Aesthetics

研究代表者
田鎖　数馬（TAGUSARI KAZUMA）
高知大学・教育研究部人文社会科学系・准教授　研究者番号：70437705

研究成果の概要：
イタリアの哲学者ベネデット・クローチェの美学が、大正期の日本文学に与えた影響を考えた。２００７年度には、広津和郎の「散文芸術の位置」という評論を取り上げ、その種の美学が流行する状況に対しての、広津の批判の意味や方法を考察した。２００８年度には、谷崎潤一郎の初期から中期の作品を取り上げ、そうした美学に影響されたことによって、谷崎の作風がどのように変容したのかを分析した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	６００００００	０	６００００００
２００８年度	５００００００	１５００００００	６５００００００
年度			
年度			
年度			
総　計	１１００００００	１５００００００	１２５００００００

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：日本近代文学、美学、クローチェ

１．研究開始当初の背景

大正文学の研究は多く見られるが、ベネデット・クローチェの美学がどのように受容されたのかということは、その美学が大正期に流行したにもかかわらず、これまで全く問題とされてこなかった。そのため、クローチェの美学の受容の全体像を示すことが、大正文学史を新たな視点から論じる上で有効であると考えた。

２．研究の目的

（１）クローチェ美学及びそれに関わる説に影響を受けたであろう大正期の芸術家を網羅的に調査し、大正文壇におけるクローチェ美学の受容の全体像を明らかにする。

（２）大正初期頃から、嘗て隆盛を極めた自

然主義文学運動に陰りが見え始めたのであるが、その要因の一端を、クローチェ美学の流入という視点から解明する。とりわけ、告白小説というものへの反発が大正期の文壇に拡大していくのであるが、そこにはクローチェ美学の投影が予想されるので、大正初期に確実にその美学に接し、影響を受けていた阿部次郎の思想の検討を基本に置きつつ、そこから当時の文芸思潮の様相を広くかつ具体的に明らかにしていく。

（３）菊池寛の、クローチェ美学で割り切れない文芸作品の価値を見つめる意識が、そのまま通俗小説の価値を認める意識と繋がっているということを明らかにする。同時に、大正中期以降の通俗小説・大衆小説の流行の背景に、この菊池と同様の意識が存在していたのではないかと予測されるので、そのことを確かめていく。

（４）「芸術は表現である」という説に違和感を覚え、かつ、クローチェ美学を乗り越えようとした菊池の芸術論にも不十分さを感じた広津和郎は、そこから、「散文芸術」という語に着目して、リアリズム文学の主張を展開するのであるが、その主張の意義及び限界を明らかにしていく。その際、「散文芸術」という言葉に与えた広津の定義の意義を、同時代文献の調査による分析を通して評価していく。

（５）以上の検討と、芥川及び谷崎とクローチェ美学との間にある接点を示したこれまでの私の成果とを基礎にして、大正文学の歴史的意義と全体の見取り図を提示する。

３．研究の方法

大正文壇におけるクローチェ美学の受容の全貌を明らかにするために、『雑誌記事索引集成』の「新聞雑誌文学一覧」に収載されている大正期に刊行された新聞や雑誌の、出来るだけ多くのものに目を通し、そこで得られた資料をもとに、分析・考察を深めていく。

４．研究成果

平成１９年度には、「芸術は表現である」という説に違和感を覚えた広津和郎のリアリズム文学の主張の意味について検討した。広津が用いた「散文芸術」という言葉は、以後の広津文学を貫く鍵となる語であるが、広津がこの語に託した意味は、独特のものである。広津は、この語に、「散文」による芸術という意味に加え、「直ぐ人生の隣りにゐる」芸術という意味を込め、人生的意義を含まない小説は、「散文芸術」の本道から外れる価値の少ないものであると定義した。これは、現在のこの語の用法と若干のズレがあるように思われるので、「散文芸術」という語が当時一般に有していた意味と、広津の定義との比較対照の必要がある。ところで、従来、この「散文芸術」なる語を広津の「造語」と見る説、この語の有効性を広津が先駆的に明らかにしたと捉える説があったが、大正後期の新聞雑誌を日本近代文学館、国立国会図書館などで調査した結果、広津以前にこの語がある程度の一般性を持って用いられていたということが分かった。そうした先行例と、広津の定義とを比較すると、広津の定義は明らかにそうした先行例から逸脱する独善的なものであったことが判明した。広津には、当時、盛んに唱えられた「芸術は表現である」という説に対して反発し、また、そうした説に不自然に囚われる当時の批評家に違和感を抱き、右のように主張したのである。そうした広津の着眼は鋭いものがあったし、それなりに意味を持つことであったのであるが、逆に広津は余りに「表現」を軽視し過ぎた。そうした姿勢が、「散文芸術」という語の定義が独断的になった要因となった。ただ、当

時の関東大震災以後の混沌の中で、多くの芸術家は、現実と自分たちにあるべき芸術の形との関係を見つめ直していた。その中で、広津の主張は、プロレタリア文学の隆盛に見られるような、文学と現実が緊密になりつつある傾向に対してはその可能性を代弁するものとして、右のクローチェ美学を中心とした動向に対してはその反措定になるものとして、文壇に少なからぬ反響を呼び起こした、ということを指摘した。

平成２０年度は、大正期のクローチェ美学の受容の様相を明らかにすべく取り組んできたが、十分な解明に至らなかったので、少し視点を変えて、クローチェ美学を受容する以前の谷崎の作品と、それ以後の作品との質の変容について考えることにした。以後の作品に関しては、拙稿「「愛すればこそ」の構造」で論じたので、以前の作品のうち、谷崎の「刺青」に焦点を当て、右の変容の問題を考える足掛かりとした。まず、「刺青」の作品の成立に『敵討討姐妃のお百』という講談本が深く関与していることを明らかにした。同時に、この作品には、谷崎の「続悪魔」という作品にも大きな影響を与えていたことを示した。その上で、「刺青」と「続悪魔」との間では、この講談本、あるいは、それをも含めた毒婦物の位置付け異なることを指摘した。「刺青」では、「愚」が徳とされていた時代が設定されていたために、その毒婦物の世界が皆で共有され、享受されていた。それ故、主人公の清吉は、周囲によって「愚」な夢想を妨げられることなく、理想の実現に向かうことができた。それに対して、「続悪魔」では、近代を舞台に自意識の強い「愚」な青年が主人公に設定されているので、毒婦物に惹かれること主人公は、周囲とは異質な異端者とされるようになる。初期の谷崎作品には、「刺青」と「続悪魔」に典型的に見られるこうした二系統の世界が書き分けられているが、後者が徐々に優勢になっていく。「芸術は表現である」という説を主張し、それとの関連で、小説における建設的な組み立ての意義に言及し始めた大正期の谷崎は、展開構成の合理性や明示的な意味付けは希薄であるが、その反面、未知なる美と快楽に対しての、当人にも十分に意識し得ない好奇心や興奮に貫かれていた「刺青」の世界から遠ざかっていたということを指摘した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２件）

① 田鎖数馬、「「愚」という徳―谷崎潤一郎「刺青」と「続悪魔」―」、『国語国文』、七十八巻、２００９年５月（印刷中）、査読有

② 田鎖数馬、「広津和郎と「散文芸術」」、『高知大国文』、三十八巻、２００７年１２月、査読無

〔学会発表〕（計　０件）

〔図書〕（計　０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
田鎖　数馬　　(TAGUSARI KAZUMA　　)
高知大学・教育研究部人文社会科学系・准教授
研究者番号：70437705

(2)研究分担者
(無)

研究者番号：

(3)連携研究者
(無)

研究者番号：